

自然災害における被災情報の表現と受容に関する研究

川崎 梨江

広島大学大学院総合科学研究科

Research on Expression and Acceptance of Disaster Information

KAWASAKI Rie

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

論文の要旨

本研究では、自然災害における被災情報の語り継ぎの実践として被災者の「語り」に着目し、災害発生後の数年間において、「語り」の内容の時間経過にともなう変容を明らかにすることを目的とした。そして、個人の体験が被災者のメッセージとして扱われる上での、送り手によって表現される内容と受け手に受容されるメッセージについて考察する。時間経過による「語り」の変容の様式は、個々人によって異なると考えられる。加えて、「語り」の変容について、送り手が常に自覚的であるとは限らないと思われる。しかし、そこに傾向性を見出すことができれば、被災者の「語り」を持続可能な防災・減災へ役立てることの一助となると考えられる。本研究においては、時間経過により「語り」が変容すること、そしてその変容には傾向性があることを仮説とした。本研究の研究対象地域は、2014年8月20日、広島市で局地的な集中豪雨により大規模な土砂災害が発生し（以下、8.20 広島土砂災害）、災害関連死3名を含む77名の生命が失われた地域である。

第2章では、被災情報の伝達方式として被災者の「語り」を研究対象とする意義を示した。本

研究では、被災情報の表現方法の中でも、時間経過による影響を最も受けやすいと考えられる、意図的かつ言語的な手法である被災者の「語り」に着目する。次に、体験の語り継ぎを担ってきた「語り部」の語りにおける「定型化」を指摘し、それが外部からの圧力により生じる現象であるとの説に対し、「定型化」とは送り手のためのものであり、送り手が求めたものでもあるという側面があることを示した。続いて、「語り」には、語る内容としての「記憶」と、それを表現するための「語り」の方式（ナラティブ）の2つの要素で構成されているという観点から、「記憶研究」と「ナラティブ・アプローチ」という2つの領域にまたがって議論を展開した。記憶には、社会において共有されている「集合的記憶」と、個々人のそれぞれが有する独自の「個人的記憶」が存在する。この「集合的記憶」は「社会化」した「ドミナント・ストーリー」として表現され、「個人的記憶」は「個人化」した「オルタナティブ・ストーリー」として表現されることが考えられる。本研究においては、「集合的記憶」と「個人的記憶」が単純な二項対立ではないことを理解した上で、「集合的記憶」と「個人的記憶」をフェーズとしてとらえて、時間経過による変容を検討していくものとした。最後に、

時間経過による変容を単なる「忘却」ではなく「社会的現実」の喪失過程であるという視点を指摘した。そして、「風化」という現象は受け手の問題として捉えられがちであるが、送り手の記憶にも「風化」は起こり得ることを示し、受け手の「風化」に関する研究は多く取り組まれている一方で、被災者の「個人的記憶」が自身の中でどのように変容していくか、すなわち送り手側の「風化」について検証した研究は少ないことを指摘し、送り手の「語り」の時間経過による変容を明らかにすることを本研究の研究課題とすることを示した。

第3章では、時間経過による被災者の「語り」の変容を検討するにあたり、まずは被災者が災害発生直後の「発災期」に自身の体験をどのように語っているのか、その特徴を検討した。8.20 広島土砂災害発生直後から収集が開始された「8.20 災害体験談集」を分析対象とし、収められた92名の体験談を計量テキスト分析し、その特徴を得た。その結果、「8.20 災害体験談集」に集められた証言は「生のまま」の出来事についての報告にとどまっており、「発災期」においては、まだ自身の被災体験に対する解釈は存在せず、したがって被災者が語り維ぎたい「教訓」も見出されていないことが明らかになった。

第4章では、ある被災者（M氏）の被災体験の「語り直し」を分析することで、被災者の「語り」は時間経過にとともに変化するのではないか、という仮説を検証した。災害発生から3年後と5年後の2度にわたりインタビュー調査を実施し、その結果を比較検討することで「語り直し」の特徴を分析し、被災者の「語り」の時間経過による変容の枠組みを見出すことを試みた。その結果、3年目インタビューにおいては、より多くのテーマについて語られており、一つひとつのテーマにおいてもより細部まで「語り」が展開されていたことがわかった。ただし、それらはM氏自身の被災体験ではなく、災害の概略であり、したがってM氏の「語り」は8.20 広島土砂災害の「社会的記憶」であると考えられる。一方、5年目インタビューでは、M氏は、これまで語ったことのない

ような「個人的記憶」について語っており、自分を主語にしての「語り直し」が確認できた。また、災害の事実を正確に表現するために表現の「型」は形作られ、災害を象徴する「場」が立てられるという、「語り」における「型」と「場」の存在意義が示唆された。ただし、この結果はあくまでひとりの被災者の「語り」に見られた傾向である。また、M氏の「語り直し」は、M氏本人にも無自覚に行われていたものと解釈できる。そこで、次章では、この傾向が被災者に一般的に見られる傾向であるのかを検証する。

第5章では、8.20 広島土砂災害において、最も被害が大きかった安佐南区の八木・緑井地区在住の19名の被災者に、発災から3年が経過する前の「復旧・復興期」と5年が経過する前の「平常期」の2度にわたり、非構造化インタビューを実施し、その結果を比較検討した。前章でM氏に確認された時間経過による「語り」の変容の特性が、M氏に特有の傾向なのか、それとも被災者に一般的に見られる傾向なのかを検証し、その結果をもとに「語り」の変容モデルを構築した。その結果、被災者の語りには「社会化」と「個人化」という2つの変容過程があり、一度「社会化」されたはずの被災者の語りが、同一者によって語られているにもかかわらず、時間経過によって「個人化」していたことが明らかになった。「発災期」には、自分の家族や身の回りのこと以外には手も頭も回らない。被災直後は自分の体験しか知り得なかった被災者たちが、時間を経て、「復旧・復興期」に移ると、近所の人びとと会話をし、またマス・メディアが発信する情報に接することによって、災害の概要が客観的に整理され、共有されやすい表層的な表現を用いて自らの被災体験を位置付ける。その結果、個々の被災体験の記憶が、「ドミナント・ストーリー」によって「社会化」していったと考えられる。しかし、周囲の被害状況を知ることによって、「平常期」には独自の深層的な表現で、自分の被災体験を「個人化」した「オルタナティブ・ストーリー」として再認識・再解釈するようになると考えられる。また、単なる変容

だけでなく、自身の体験が「ドミナント・ストーリー」に回収されることに対する「抵抗」も確認された。時間経過によるこのような「語り」の変化によって、送り手の伝えたい「教訓」の表現が変化するだけでなく、受け手が教訓として受け取るメッセージも異なると考えられる。したがって、時間経過による被災者の「語り」のこのような変容は、防災・減災への活用において、大いに考慮されるべき事項であると考えられる。

第6章では、本研究で得られた結果を、先行研究において展開されている語り継ぎの議論に適用することを試みた。先行研究において展開されている語り継ぎに潜む課題とは、「型」がひとつに収斂されていくことで「語り」の多様性が失われていくことである。しかし一方で、送り手にとっての語りの「型」と「場」は、普遍的かつ継続的に教訓を語り継いでいくためにのよりどころとなるものである。防災・減災において重要なのは、災害を体験したことのない受け手が今後起こり得る災害を自分の問題として捉えることであり、それが受容されるメッセージの中心であるべきである。そのために重要になるのが、送り手と受け手の「個人的コンテクスト」を一致させることである。「今後誰も自分と同じ目に遭ってほしくない」という思いから、自らの被災体験を語る被災者は多い。しかし、そこに解釈の余地がなければ、受け手にとっての自分ごとにならない。ここに、語りの「型」がひとつに収斂していくことの危うさがあり、「型」や「場」に収まりきらない「オルタナティブ」な「個人的記憶」の意義が存在する。送り手の被災情報の表現が受け手にとって有効に受容されるためには、送り手と受け手との間に「個人的コンテクスト」に基づく共通項が必要であり、そのために「語り」の多様性が担保されている必要があることを示した。

最後に第7章では、本研究で得られた成果を総括し、今後の展望を示した。3年目の「復旧・復興期」には「ドミナント・ストーリー」に当てはめるように客観的・相対的に位置づけていた自分の体験を、周囲との復旧・復興の速度の違いや

被災者ではない人たちとの交流によって、5年目の「平常期」には主観的・絶対的な視点から捉え直したことで、表現される内容が変化したと考察できる。時間経過によって、「被災者でない自分」という「オルタナティブ」な視点を取り戻すことによって、「ドミナント・ストーリー」に抵抗を覚えるようになったと考えられる。本来、被災者の「語り」は多様なものであり、受け取られるメッセージもまた多様なものであるはずである。一方、被災者が「教訓」を普遍的なものとして継続的に語ることができるようにすることが、「型」と「場」の存在意義であった。しかし、「型」においては「個人的コンテクスト」が考慮されなくなる傾向が見られた。今後は、時間経過による変容、および「型」の存在を考慮し、「語り」の多様性を担保していくための方策を検討する必要がある。